

7 グループ討論、全体会グループ発表

— グループ討論 —

討論テーマ	グループ	参加生徒	ファシリテーター		
授業① 「日本で暮らす難民について考えよう」	ア	5 人	瑞陵高等学校	教頭	金廣伸也
	イ	6 人	一宮高等学校	教諭	山田仁美
	ウ	6 人	一宮西高等学校	教諭	植木佐織
授業② 「食品ロスのない持続可能な社会を目指す —私たちは生命をいただけて生きている—」	エ	6 人	津島高等学校	教諭	杉浦美香
	オ	4 人	刈谷北高等学校	教諭	山本孝次
	カ	4 人	星城高等学校	教諭	長江孝継

— グループ発表 —

授業①「日本で暮らす難民について考えよう」

- ・ 難民ってどんな人たち？
- ・ 日本の難民制度って？
- ・ 難民と地域のつながり
- ・ 私たちができることはなんだろう

【グループ ア】

・ 私たちは、難民について国内と国外に分けて調べた。なぜ難民がいるのか、大きな理由は、宗教、紛争、自然災害、迫害。紛争といっても、一つとして同じ紛争はない。米露といった先進国が入ってくること、食料難、その場所が危険になるなどいろいろな理由がある。

この難民の中には、国外に出た避難民がだいたい 4,270 万人。経済的な理由や地理的な理由、国に思い入れがあるとか、介護をしなければいけないお父さんやお母さんがいる、などの理由で国外に行けないという国内避難民が 7,350 万人。国が滅びてしまったなど、いろいろな理由で国籍のない方が約 400 万人。

・ 私たちは、国内だけだと、さすがに視野が狭いと思い、世界についても少し調べた。

オーストラリアは、2023 年の難民申請者数が 82,625 人。日本と同じ島国だから、自国民ファーストで、予算が少なく、支援を受けられたのは、1,837 人。フランスの 2023 年難民申請者数は 146,175 人で、支援を受けられた人数は 102,196 人。フランスのサポートの素晴らしいところは、申請者だけではなく、家族・パートナーといった



周辺者も、サポートを受けられる仕組みになっている。住むところに困る難民に対して、政府が管理する施設を提供するというのがフランスの特徴で、日本と違うところ。ただ、食事は賄われないので、支給される 3.40 ユーロ、日本円で 400 円で三食を賄わなくてはならない。次は、ドイツ。私が調べた中で、一番手厚くていいなと思ったのがドイツ。2023 年難民申請者数は 368,360 人。受け入れたのは、過去の人を含めて 522,695 人。ドイツが素晴らしいところは、フランスと同じく、一人だけに与えるのではなく、その周りの人もサポートを受けられるというのが、特徴の一つ。もう一つは、補助金が結構支給されること。例えば、独身の人なら、月収が 607 ユーロ、日本円でいうと 62,000 円くらいもらうことができ、かつ、政府運営の施設で過ごすことができる。さらに、無国籍の人でも、医療とか、難民自身にそのスキルがあれば職場で雇ってくれるというサポート。

私たちは、船や飛行機でしか入れない島国であるオーストラリア・日本と、国境を超えての移動が容易なドイツ・フランスの違いを感じた。ヨーロッパでは、人が国外から来るという認識が高いので、こういったサポートも手厚いのかなと思った。

・次は、ロヒンギャ問題。ロヒンギャとは、仏教徒のビルマ系民族が多数派を占めるミャンマーで暮らしているベンガル系少数民族のイスラム教徒のことで、最初は、ミャンマーでも受け入れられてきたが、ミャンマー政府が変わってしまい、ロヒンギャに対する迫害が強まる中で、難民者数は、右肩上がりに増え続けた。ロヒンギャ難民は、主にバングラディシュに受け入れられてきたが、数が増えるにつれて、国民も反感を持つように。このような問題があるから、日本も含め外国では、難民の受け入れが難しいのではないかと考えた。

・次に、日本の難民審査の難しさについて説明する。海外の事例を見て、日本の難民認定が少ない理由を調べた結果、日本の難民認定基準が、すごくハードルが高いということが一つ。認定基準は、国によって扱いが変わっており、日本のハードルは高く、海外から、解釈がとても狭いと言われている。二つ目が、手続きが適正かという点。審査を受ける難民側に、難民であることを証明するために必要な主張をする機会が十分に与えられて、公正に手続きがなされているかということ。具体例としては、言語。必ずしも適切な言語、母国語、公用語による中立的な通訳が手配されていないのに、証拠書類は、日本語での提出が求められるというところが、すごく難しいところになっている。

・最後に、ムーンショット。この問題を解決するのにどうすれば良いのかということに対する私たちの答えは、「難民に対して新しい制度を作る」こと。日本に来た難民が、日本の文化に対してリスペクトがない行動をとる時に私たちは不快感を感じてしまう。だから、彼らがある程度、日本語でコミュニケーションが取れて、かつ、私たちの文化、例えば会釈するとか、そういう小さな日本のマナーを習得してそれを実行してくれた時に、私たちは、「ああ、別に、難民悪くない。ちゃんとリスペクトしてくれてる」となると思う。なので、私たちは、日本語を教える、プラスで、日本の小さなマナー・モラルも同時に教えていけばいいじゃないかと思った。難民申請している間が結構長いので、その審査を受けている間に、日本語プラスマナーが学べる施設を作って、そこに義務的に難民の人を入れて学ばせれば、もし申請が通った時にも、

自立はできるし、しゃべれるし、いいことしかない。難民に対して新しい、このような制度を作るという結論になった。

【グループ イ】

・まずは、難民の定義について。難民というのは、人種、宗教、国籍、政治的意見又は特定の社会集団に属するという理由で、自国にいと迫害を受ける恐れがあるために、他国に逃れ、国際的保護を必要とする人々、また、国際的・国内的な武力紛争や戦争から他国に逃れてきている人のこと。

・日本での難民の扱いは、管理するという面が大きい。また、難民についての日本での関心や知名度は低くて、偏見や誤解を招くことも多い。

・難民の例として、クルド人。クルド人排斥のデモとか起こっている。日本人は、歴史的背景もあり、他の民族とか外国人と暮らすことが、性格的に向いていないのではないかと感じる。また、難民申請の仕組みは、裁判所で審査することが必要。

・日本が難民を受け入れない理由は、治安や秩序が乱されることや文化・法律の違いだったり、日本語や日本の文化の教育が身につけていないので、日本で暮らしていくのに障害が生まれてしまうからだったり。就職の環境整備に時間がかかったり大変なので、あまり難民を受け入れない理由になっているとのこと。

・自分たちでできることは何だろうと考えたときに、一番大事だと思ったのが、難民を知ること。具体的には、まず、難民の人たちへの偏見を無くすために、地域で交流会を開いたりする。難民の人たちに、その国の伝統的な文化、音楽、芸術的なもの、あるいは食事などを日本人の私たちに紹介してもらったり、逆に、日本人からも、日本の伝統的な文化だつたりを紹介して、日本人と難民の人たちの交流を深めていくということをしていくといいんじゃないかなと考えた。

・ただの文化・イベントでは、日本人はあまり参加してくれないかなと思ったので、経済的な効果があると良いと思った。難民の故郷の文化を、地域の特色として取り込んで、その地域の伝統文化にすることで、経済的な発展を目指したりとか。ふるさと納税の料理を作ったりとか。そういうのもしていくとだんだん認知度が上がっていつて、難民について偏見が少なくなっていくと思う。



【グループ ウ】

・まず、最初に、そもそも難民ってどのような人を指すのか調べたので説明する。難民とは、紛争や内戦による迫害を受けた、若しくは、受ける可能性があり、命の危険に怯え、自国を追われている人のこと。

・日本の難民申請者は、2024年に12,373人。うち190人が難民認定された。人道的配慮で保護される人は、約1,500人。このように、日本には、難民認定されている人が

とても少ないことが分かる。なぜこんなに少ないのか、難民を受け入れるメリット・デメリットについて考えた。

・メリットは、日本でできることが増える、SDGsに貢献することができる。国際社会での信用が得られ、発言力が増す。人の命を助けることができる。グローバル化、国際色が強くなり、いろいろな国の文化を知るきっかけが多くなる。労働力の確保、難民を受け入れることで高齢化による若い働き手の不足を補うことができる。

・デメリットとしては、一番多く挙げたのは、治安の悪化。これは、実際にヨーロッパでも問題となっている。他には、難民支援のために社会保障のコストが上がること。文化の違いによる摩擦や、難民が日本人より安い賃金で働くことによって日本人の職が無くなるということがあった。

・このようにメリット・デメリットを挙げていって気づいたことが、メリットとデメリットに関係があるということが分かった。例えば、難民を受け入れることで、いろいろな文化が入ってきて、先程の授業であったような祭りなどの皆が楽しめることがあったり。逆に、文化の違いから、摩擦が生じて、日本人と難民が仲が悪くなったりとか。他にも、外国人の安価な労働力が入ってくることによって、労働力は確保されるが、日本人の職が無くなってしまったり、メリットとデメリットがしっかり関係があるのかなと思った。

・このようにメリットとデメリットを挙げてみて、どのような面を重要視するかは、人によって異なるため、正解は無いのではないかと思った。もし、難民の受け入れを拡大していくとしたら、しっかりとした制度を整えるべきだと思う。

<質 問>

難民の受け入れを拡大するに当たって制度を整えとおっしゃっていた。具体的にどのような制度が整うと良いと思うか。

<回 答>

制度を整えるということで、まず、挙げたデメリットのように、例えば、治安の悪化であれば、受け入れした人をしっかり把握したりだとか、難民として来た理由をしっかりと明確にしておくこと、など。



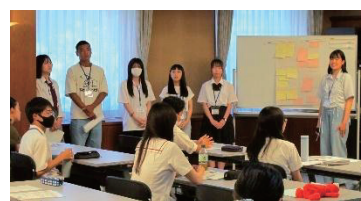
授業② 「食品ロスの出ない持続可能な社会を目指す

ー私たちは生命をいただいて生きているー

- ・ 食品ロスはどうした発生するのでしょうか。皆さんで意見を出し合って、その原因をまとめてください。
- ・ 「SDGs12.3 食品ロスを半減すると SDGs12.5 飢餓をゼロに」を同時に解決するためのアイデアを出し合ってください。
- ・ アイデアを実現するために、皆さんがこれからやってみたいことを話し合い、まとめてください。

【グループ エ】

・ 私たちのグループは、食料問題についての課題を話し合った。まず、最初に、皆で、どのような課題があるのか、原因を突き詰めて、そこから食品ロスを減らすための問題を黄色の付箋でそれぞれ意見を書いて貼った。もう一つ飢餓を減らすことの意味を、ピンク色の付箋に書いて貼った。その後に、皆で、いっぱい出た意見を、どうやってまとめられるか、どうやって分類できるかを皆で話し合った。



最初に食品ロスを減らすという観点から。まずは、消費量を減らす。そもそも使う量、食べる時にどうするかということについて話し合った。次に、売り方。飲食店やスーパーで、どうやって売っていけば、食品ロスを減らせるのか、ということについて。もっと根本的に、私たちがどうしてこんなに食品ロスについて知らないのか。やはり教育ってところが大事なんじゃないか。教育について改善しなきゃなあということを考えた。

そこから、飢餓について。飢餓を改善するという課題に、どうやってつなげようということを話し合った。飢餓をなくすためのボランティア活動とか、募金とか。教育から課題解決につなげていく、消費量を減らすことによって食料が余って、それを飢餓のある国につなげていくという形というものを、皆で考えることができたかなというふうに思う。

・ 最後は、皆で考えたこと、結論を自分たちでまとめたので、一人一人が今から言っていきたい。

まずは、必要以上に使わないことで食料が余る、ということを私は考えた。

・ 私は、自分たち自らが進んで、世界規模の飢餓の問題を考えることで、視野が広がって、今の現状に必要なものが見えてくるのではないかと考えた。

・ 私は、各企業から出た、まだ食べることはできるけれども、必要のないものを消費期限別に分けて、近いものは近くの子ども食堂へ、長いものは必要としている国や家庭に届けることを考えた。

・私はとにかく、身近でできることを考えて、家での食品ロスを減らすことを一番重要だと思った。

・私は、店で買い過ぎたりしても余ってしまうし、買わなさ過ぎると、その店でゴミになってしまうので、上手い塩梅というのは難しいかも知れないけど、知識を持って行動すること、知識を持って生活することで、何か少しでも変えられることがあるのではないかと考えた。

・私は、すごく大きな目標になるが、国から国への食品の受け渡しの時専用の安くて早い交通手段を作ること。そして、気候変動に強く、また、栄養価の高い食品を開発することを考えた。

・以上が、私たちのグループで出た結論、それぞれの考えです。最後にこの討論を通して、大きな課題とか大きな問題であっても、小さなことの積み重ねから始まるんだなあということが、皆で共有した思いになった。

【グループ オ】

・まず、なぜ食品ロスが発生するのかを考えて出た意見が、食料の買い過ぎ。保存食とか備えとして買って、賞味期限が切れてしまっていたとか、そういう備えをし過ぎという意見。愛知県は、地震・豪雨とかの、避難するほどの大きな災害をたぶん皆、最近、経験したことがなく、食べ物を捨てても食べ物に困ったことがないから、捨てても、また食べれるだろうという意識が芽生えてしまっているという意見。例えば、今、令和の米騒動と、ニュースでよく放送されている。



お米を百人欲しい人がいても、百個お米があれば皆買えるはず。それだと足りないと、百二十個あれば皆が安心して買えるという意識が芽生えてしまっていること。給食や外食で余った料理を持ち帰れない。持ち帰れずにそのまま破棄されてしまうなどが原因で食品ロスが発生してしまうという意見が出た。

・その意見を踏まえた上で出されたアイデアが、外食の時などにタッパーを持っていくことや、詰め替えの商品を買うこと。また、規格外野菜がスーパーなどの売れずにすごく捨てられてしまうという問題があると、先生たちからお聞きして、この「三本の矢作戦」を考えた。

・そこで、我々は二人の専門家の意見を参考にした。まず、瑞陵高校の森先生。家庭菜園の不揃いの野菜を持ってきてくださった。

—森先生 野菜を見せながら—

「このようにくびれちゃったり、変な形になるのが大体三割。まともに商品になるのは少ない。そういうのを何とかしたらいいんじゃないのと、そんな話をちょっとさせていただいた。」

・あと、先程、百瀬先生から、フードドライブなど貧困家庭に食事を届ける活動があっても、多くの、生の食品とかは、衛生上の問題とかで届けられないという問題があるとお聞きしたので、それを組み合わせて作ったのが、この「三本の矢作戦」。

まず、中心となる、農家が多くの不揃い商品などを生み出してしまうことがあって、それをまず加工用に回してしまえば、それを捨てずに再利用できるので、食品工

場に回したり、スーパーなどの業者で安く、不揃い商品などのコーナーを作って、安く、規格外野菜などとして売る。しかし、あまり大量にそれを売り過ぎてしまうと、普通の状態のものが売れなくなるので、自治体がそれを買取り、すぐに貧困家庭に届ける。また、自治体が管轄地域を回る、巡回バスを作って届ける、また、農家からの回収にも使うということを考えた。また、先程の授業でもあったように、業者や食品工場からの残飯を肥料にするという、サーキュラーエコノミーも忘れない。

・私たちは、このように「三本の矢作戦」を実行することによって、全ての人が利益を損なわずに、このような食品ロスや貧困を防げるということもできるのではないかと思った。

【グループ カ】

・私たちは、「もしもドーナツが百個余ったら」というテーマで、どうやったら、食品ロスを減らせるかを考えた。

まず、ドーナツ百個そもそも余らせないという意見が出てきた。例えば10分前に値引くとか。SNSでタイムセールのお知らせをすとか。また、バケツケーキみたいなので、形を変えて、冷凍食品とかにして形を変えて、まずは余らせないという意見。ドーナツ以外にも話が発展した。料理に対しての知識を持つことで、例えばこんなに油は要らないとか考えると、自ら手作りすることで食べ物に対する愛着が湧いたりとか。また、二郎系ラーメンみたいに残したら罰金とかいう意見も出た。



次に、この百個のドーナツが余ったら欲しい人に渡すという意見が出てきた。例えば、高校生に配るとか、SNSで欲しい人を募集すとか、従業員のの人に渡すとか。今でも、フードロスのためのアプリがあり、そのアプリでは欲しい人を募集して渡すみたいな活動が行われているそうだが、やはり問題点もあるそう。例えば、この余ったドーナツを誰かに渡して、その渡された側の人食中毒とかになっちゃったら、責任を取らなければいけないのは、ドーナツ屋さんの方。そうなってしまうと、あまり意味がなくなっちゃうということで、やりづらくなってしまう。じゃあ、どうしようかと考えた時に、この責任の所在をちょっと変えよう。ドーナツ屋の責任ではなくて、受け取った側に責任があることにしてしまえば、ドーナツ屋は、百個のドーナツを渡しやすくなると思う。どの法律を変えればいいのか分からないが、これを変える必要があるのではないかと意見も出た。

ドーナツから少し離れるが、輸入の制限とかしたらどうかと。肉、食べ物…。日本でも季節のものを食べるという文化が、最近なくなってきていて、夏でも冬でも、キュウリが出てくることへの気持ち悪さみたいなものが、何か薄れてしまっているの。その季節、土地の物を食べるという習慣を身につけた方がいいんじゃないという意見も出た。

・私たちの班は、こういう感じで具体例を出して考えた。話し合いの中で、もともと今の若い世代の方とかは、あまり食に関心のある方が少ないのではないかと想像した。旅行とかも最近減り、旅行先で美味しい食べ物に出会って、その地域の食文化と

かにも触れられて、そこから食に関心が出てきたりする、そういうきっかけとかも、今の時代は薄れてきているというふうに感じている。食べ物の知識も、食べ物のことを皆が知ろうとする傾向も少ない。まとめると、一人一人が食にもっと関心を持って、食品ロスの問題を解消したいと思わないかぎり、この問題は解決しないと思う。まずは一人一人の行動を見直していくことが大事かなって思った。

<質 問>

若者は旅行が減っているから、食に関心が薄いとあったが、私は、食品と旅行を結びつけるという考えが無かったので、すごく独創的でいいなあって思った。それに関連して、もしも、食品ロスを減らすために、若者とかに、政府が食育のための補助金を出すっていったら、個人的にはやり過ぎかなって思うんですが、どう思うか。

<回 答>

旅行とかもそうだが、食に関する体験を増やすことによって、何か食の大切さみたいなことを知ってもらうための補助金であれば、教育の一環としての補助金だと思うので、いいじゃないかと思う。

<質 問>

季節のものが年がら年中食べられるというのは、確かに気持ち悪いなあとと思った。実際、「季節のものを食べて」とか宣伝するために、法を制定するとしたら、どんなものを制定しますか。

<回 答>

日本の和食とかは、季節によって変わるじゃないですか。季節ごとの食のレパートリーを増やすみたいなのも一つあるんじゃないかと思う。



— ファシリテーターからのコメント —

<金廣伸也先生 グループ ア>

グループ討論では難民を担当したが、私は理科の教員なので、食品ロスのことをちょっとお話しさせてもらう。最近ニュースで、惣菜とか売れ残りが心配なものについて、曜日、時間帯、天候、気温、その他さまざまな要素をデータ化し、売れ行きがどう変わるかを AI に学習させて、「この曜日のこの時間だったら、これぐらい売れる」という予想を立てて、売れ残りが少なくなるように商品を作るというようなことをやっているスーパーもあるそう。これは数年前には無かった考え方。ひょっとしたら、5年後、10年後、全く違う考え方が生まれてくるかもしれないし、新しい技術が開発されてい



ることも考えられる。今は、ここまでが最先端かなとは思いますが、皆さんにお願いしたいことがある。皆さんは現在高校1年生から3年生。これから大学に行って勉強したりとか、ひょっとすると留学するとか、社会に出るまで、まだしばらく時間があると思う。その間に、社会はどんどん変わっていき、新しいことがいっぱいできるようになると思う。それをどうやって使っていくかと絶えず勉強し続けていただけるといいかなと思う。

それから、理系の方がよく「国語とか社会は関係ないでしょ」とか、自分は文系だから「数学・理科はやらなくていいでしょ」とか考える人がいるが、今は、経済をAIで考えたりとか、文系とか理系とかの境界がなくなりつつあり、さらには文理融合型の学部とかも増えてきている。ぜひ、高校で受ける授業を、「文系だから」「理系だから」と分けることなく、一通りきちっと勉強して、ある程度の知識を得たうえで、大学の専門的な勉強につなげていくとか。社会に出てから「こういう考え方もできるよね」などと広い視野で物事を考えられるように勉強してもらおうといろいろな場面で生きていくのではないかなと思うので、これからも頑張してほしい。

<山田仁美先生 グループ イ>

最初、割と大人しい感じで始まったので、発表はどうなるのかなと思って、内心ドキドキしていた。本番はとても上手にプレゼンをしてくださったので、「わあ、凄いなあ」と思った。皆さん、世代的な問題もあると思うが、本当にプレゼン自体が上手で、とても立派だと思った。



この講座に参加して、「面白かったな」とか、「いろいろ考えさせられるようになったなあ」という思いが、きっとどの方たちにもあったと思う。それを今日で終わらせずに、継続的に考えていただくということと、それから、自分がやっぱりできることから少しずつ行動に移していくことが、一番大事なことだと思う。学校の友人・知人たちの中でも、いろいろな意見があったりすると思うが、お互いにどんどんコミュニケーションをとっていきながら、今日のいろんな議論を踏まえて、少しずつ行動に移していってもらえると、世の中がちょっとずつ良くなると思う。今日は、いいものを体験させてもらった。

<植木佐織先生 グループ ウ>

本日の皆さんの話し合いに私も参加させてもらった。難民を受け入れることのメリットとデメリットを考える中で、それらは表裏一体であるという気づきが得られたのは大きな収穫であると感じた。社会にはさまざまな問題があり、否定的にとらえられることも少なくない。しかし、表裏一体であるからこそ、それを前向きにスイッチできる力があれば、問題解決の糸口をつかむことができると思う。これからも多くの課題に直面すると思うが、今日の学びをきっかけに、前向きに取り組んでほしい。



<杉浦美香先生 グループ エ>

私自身もだが、皆さん、緊張してグループワークに入って、最初はどうなるかなと少し思っていた。いろいろな問題を分解して、細かくして考えて、だんだん大きな

るようにつなげていく、そうした中で、皆さんが語りだすと、やはりそれぞれ問題意識を持っていた。そのような部分が、私としてはすごく印象に残った。個々で問題意識を持って、日々過ごしているということが伝わってくるようなグループワークだったなと感じている。いろいろな意見が出てきて、人の意見を聞くことで視野が広がる部分がすごくたくさんあったと思う。ダイナミックに、食品ロスの問題だったり、飢餓の問題を考えるという方もいれば、身近なところから考える方もいて。今後も大きく捉え、また、時にそれを分解していったって、自分自身は一步まずは何ができるんだということを考えていけたらということを、私自身も学ばせていただいた。



<山本孝次先生 グループ オ>

グループの皆さんは、司会、ディスカッションの記録、模造紙への清書、意見のとりまとめなど、自ら役割分担し、皆それぞれ活躍して、上手にやってくれた。アイデアも、その場で出すだけではなくて、考えてきてくれたものから出して、そこから広げたり深めたりしていた。普段からよくものを考えていて、関連するものを思い浮かべたり、そこからアイデアを広げたりできるのだろう。人の話に、ちゃんと自分の経験から物事をつなげられて、とても良い話し合いだったと思う。上手に世の中が回るように、サーキュラー（循環型）という考えを念頭に置いて、話し合いをやっていってくれたところが大変良かった。



今日出たアイデアの一つだけでも、これから実際の行動に移すことができれば良いと思う。社会を変えていくには「行動」にまでつなげていくことが大事なことで。これからも考え続けて、自分なりの探究を進めてくれたらと思う。今日は、とても良い話し合いに参加して嬉しかった。

<長江孝継先生 グループ カ>

この講座に何年か継続して参加しており、グループワークは大変楽しみにしている。今日もとても楽しかった。去年担当した生徒が、また私のグループに入ってくれて、また素敵な意見を聞かせてくれて良かった。



私は、今日いろいろ話を聞く中で、佐藤先生の「愛してる人を認めなさい、受け入れなさい」という言葉がヒットした。食文化のことに関しても、難民のことに関しても、やはり自分たちの国が好きだとか、相手が好きだとか、愛しているんだということを、日本人は、言わなきゃいけないのかなと。私は、英語の教員で、海外に行くと、日本人は自分のことを褒めたりなかなかできない。本当は自分の国が一番だと分かっているのに褒められない。これから一緒に食文化を共有していくのだったら、日本人のことを認めてくれる人を好きだと、一所懸命、自分たちが発信していかないと強くなった。

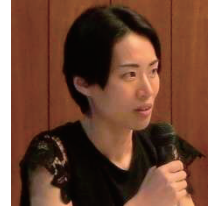
いろいろ話ができ楽しかった。今日思ったことを帰って伝えるのはとても大切だけれども、もう一度、日本人は日本の文化を見直して、「好きだ」「愛してる」ってどこかで言えるようになっていけばいいかなと思った。

— 講師からのコメント —

<羽田野真帆講師>

今日は、皆さん、本当にどうもありがとうございました。私もとても楽しませてもらった。

最後の議論を、少しずつグループに入りながら聞いていて、私も最後の発表はどうなるんだろうとドキドキしていたが、非常に皆さん上手に発表されていた。



難民受け入れのメリットとデメリットというテーマ設定をして議論していたグループがあり、治安が悪化するとか、逆に多文化共生が進むとか、という意見が出たと思う。でも、難民を受け入れれば多文化共生が進むのかと考えると、そうではない。同様に、難民を受け入れたら、治安が悪化するのかというところではない。そうなる原因があるし、複数の理由が重なって、そのようになっていく。この点、制度を整えていくことが大事だと発表され、それに対して、制度を整えるためにどうしたらいいと思うかという質問がさらに出て、治安の悪化を防ぐためには、そもそも難民の人たちがどういう状況なのか把握することとか、難民がどうしてどういう事情で難民になったかということをよく知ることがまずは大事だと思うと回答された。おそらくグループワークでの議論では出てこなかったけど、議論したことを踏まえて、質問を受けて、考えて、そういった意見が出た。それこそが、多文化共生を進めるため、若しくは、治安の悪化を防ぐために必要なことだと思う。

今日は、議論して考え続ける中で、皆さん一人一人の考えが深まっていっていることをとても感じて、本当に皆さん、すごいなあと思った。これからも考え続けてもらいたいと思う。でも、頭ばかり大きくなってもしようがないので、ぜひ行動にも移してほしいと思う。私もボランティアで難民支援の活動をしてきたことが、今の仕事につながっている、ということもあるので、ぜひ、大学になれば、自由時間も増えると思うので、自分が「これだ」と思うことを、積極的に行動に移してってもらいたいと思う。今日は、本当にありがとうございました。

<佐藤久美講師>

私たちの話を聞いていた時も、皆さん、一所懸命聞いてくださっているとしましたが、グループワークになったら、皆さん、生き生きとして、堂々と意見を述べていらっしゃいましたね。先程のグループ発表でもうまくまとめていたので、この短時間の間に、よく頑張られたと思う。



本日は難民について考えようというテーマでお話ししましたが、移民と難民とが、まだまだ区別がついていないのではと思いました。ただ、外国から来た人をどう受け入れていくかという点では共通点がある。国境を越えて人が移動する時は、いろんな背景があって動くということをお話しした。これは、プッシュ要因とプル要因の原則というものです。プッシュ要因としては、自分が今住んでいる所にいると、自分の生活が脅かされる、将来が見通せない、ということで、プッシュされる。そして、プル

する側は、仕事やより良い生活がこちら側にあるとしてプルする。しかし、命の危険を感じて国外へ出ようとする難民の人たちはどこの国へ行くか、という自らの選択の余地はほとんどない。

ここで、日本の歴史を考えてみる。日本は、ペリーが来て開国した。当時の日本は、貧しかった。当時の日本にしては、人口が多過ぎた。だから、南米やハワイに行きたくて、移民という形で出ていった。夢を抱いて、希望を抱いてブラジルなどに行ったが、待ち受けていたのは過酷な状況だった。奴隷のように扱われて、鞭で叩かれながら、自分たちの生活を築いていった。太平洋戦争が始まって、自分たちの祖国が敵国になってしまった時に、アメリカにいた日系人は強制収容所に入れられてしまった。現在は、日本の方が経済力があるから、ということでブラジルなどで苦勞した人たちの三世、四世が来日して、仕事をしている。そういう状況があったという歴史も踏まえて、これから、私たちは移民をどう受け入れていくか、あるいは、難民をどう受け入れていくかという未来を考えていくことが、とても大切。

今日の発表で、他の国との比較をしてくださったグループがあった。カナダに留学していたとのことだが、カナダは、1988年に多文化主義を初めて法律にした国。世界で初めて、多文化主義を国の指針として掲げた。そして、ドイツはもともと純血主義だったが、移民を受け入れる国になった。私は、ドイツのいろいろな省を巡って、いかに移民を受け入れてきたかということヒアリングして、論文を書いた。その時に、移民統合省の人が、「私たちは、世界に見せなくてはいけない姿勢がある。We are no more Nazis.であるということだ」とおっしゃった。深い反省から、移民や難民を受け入れる国になっている。また、どこに住まわせるかということや、どういう教育を受けさせるかということも含めて、しっかりとしたプログラムを作っているのがドイツ。ドイツは、不法に入ってきた子どもでも、義務教育の期間であれば、絶対に学校に行かなくてはならない。学校へ行かせていない家庭があることが分かると、警察が介入。それぐらい教育を大切にしている。そうやって、ドイツ語を覚えてもらって、ドイツの文化も習慣も覚えてもらって、統合していく。例えば、日本に入ってきたから、日本のルールを守れ、日本のやり方でやれというのは、同化主義である。それでは、うまくいかない。お互いの文化を大切にしながら、社会を作っていくことが必要である。

それから、最後に、フードロスに関連して、AIの話が出て、とても面白いと思った。私の今いる大学では、「Society 5.0」の世界をいかに実現していくかという授業を行っている。社会にあるさまざまな課題をイノベーションとデジタル技術でどう解決していくかという内容。ゲームを社会課題の解決につなげるという授業もやっている。皆さん、「Society 5.0」をちょっと頭に入れておいてほしい。これは、内閣府も力を入れている方針である。

皆さん、今日から、世界のニュースへの関心が高まると思う。ウクライナはどうなっているだろう、ガザでは、子どもたちはどんな状況で過ごしているのだろう、など、世界のニュースに目を向けて、毎日過ごしていただけたらと思う。お疲れ様でした。

<百瀬則子講師>

私の課題、テーマのグループの皆さんのディスカッションは、すごく面白かったと感じた。何が面白かったかという、どちらかと言えば、調べて答えを導き出すということではなくて、こういうテーマがあるんだけど、それは、どうやって解決したら良いのか、ということ、皆さんが一所懸命、いろんなアイデアを出して、自分ごとにしていったということが面白かったと思う。特に、SDGsのような、世界中の目標においては、遠い世界のことでない一人一人の自分ごとにしていくことで、それが叶うんじゃないかなと思っている。



エのグループの、小さな問題解決を大きなシステムにしていくということは、本当にいいやり方だと思うので、ぜひそういった考え方は大切にしてほしいなと思った。

オのグループは三本の矢作戦、すごいですよね、いろんな要素を同時解決するというのは、とっても大事なことで、最近はその「ネクサスアプローチ」と言う。「ネクサスアプローチ」というのは、例えば、脱炭素と食料問題と水問題を同時に解決するにはどうしたら良いかとか。それに、健康問題だとか、人の問題だとかいうのも、一緒に解決できないかとか。そういう、幾つかの課題を同時に解決していくにはどうしたらいいかっていうのが、今、これからの課題解決の進め方である。私が、お話の中で申し上げた「アウトサイドインアプローチ」、自分のところだけ解決するんじゃなくて、自分のところの課題を地域社会とか、地球環境の課題と一緒に解決していくというやり方。それと、「ネクサスアプローチ」、幾つかの課題を同時に解決するというのを、高校生がものの見事にやってくれた、すごいなと思った。

カのグループは、「ドーナツが百個余ったらどうするんだ」という課題に対して、いろんなことを考えてくれた。自分自身がどうしたら解決できるのかということを考えて、「実装」すること。調査研究しただけで終わりじゃなくて、それを実装、実社会の中でどうやって実際にやっていくのか、というところまで、皆が一所懸命考えてくれたのは、すごいことだと思った。探究型のお勉強というのはいっぱいあるが、調べて「そうだったんです」で、終わりじゃダメ。それをどうやって実社会の中で実現していったら良いのかということ、ムーンショットで結構なんで、20年後、皆さん方が社会の中核になった時に、「やってやるぜ」みたいなことを、常々考えてもらったらいいと思う。

私は、大学卒業して45年間、今でも働いているんですが、自分がやりたい夢を、会社のヒトとモノとカネを使って実現するというのが、どれだけ気持ちがいいか。ということを常々やりながら45年過ごしてきた。私は食品リサイクルループ構築とか、実現できていなかったことを可能にしてきた。法律の解釈を広げることもやった。それを一所懸命考えて、いろんな人たちと組んで、予算も取って、実際にやって、成果を出して、例えば、それが社会のルールになってったりとか。そういうことを皆さん方も常々考えていると、結構、働くということが面白いなと思うのではないかな。ぜひこれからも、今回のチームメンバーのように、知らない人たちと一緒に考えて、一

緒にやりたいことをやっていくということ、これから生きていく中でも実行していったら面白いと思う。頑張ってください。

<中西久枝講師>

皆様方から出た感想に関しては同感することが多かった。

私自身がこれまで、留学生を主に英語で教えるという教育を26年間、名古屋大学で11年間、同志社大学で15年間してきた。そこで教えた留学生が今、どこで何をしているのかということを紹介しながら、お話を終わりにしたい。



アフガニスタンの学生は、十数名受け入れて、本国に帰したが、その後、タリバンが復活してしまったので、カナダに3人、イギリスに3人、それからアメリカに2人、残りの7人は未だにタリバンの政権下で、アフガニスタンに留まるという選択をして、元気で生活している。

ミャンマーは、軍政府が途中で強くなってしまい、ミャンマーの外交官が1人いたが、彼は、バングラディシュのNGOの国際ビューローで仕事をしてから、一旦ミャンマーに帰ったが、今はベルリンにいる。正式な大使館はないが、ミャンマーとヨーロッパ諸国との関係がうまくいくような、リエゾンオフィスといったものを立ち上げて活躍している。

スリランカの学生は、博士号を取ってスリランカに戻ったが、宗教的・社会的差別を受け、家族を連れて、ベルリンに移民として移った。アフガニスタンの難民たちを受け入れているイラン人の友達がいる。

マリという、とてつもなく大変な紛争国の学生を受け入れた。本国に帰る予定でいたが、電気が一日5、6時間しか通らないという厳しい状況の中で、同じマリ人と出会って結婚してオランダへ。私の教えたマリの女性は、フンボルト財団という奨学金をもらい、当面はドイツに。ヨーロッパは近いので、旦那さんが大学で教えているオランダとドイツを往復しながら、彼女は、研究者としての道を歩んでいる。

幸い、今ソーシャルメディアが発達しているので、20年前に教えた学生も、ラインやワッツアップで、日ごろ、私にメールを送ってくれる。それを読んで何を感じるかというと、故郷を離れて移民として出ていく、あるいは、難民として受け入れてもらったのち、その同じ国で長期間滞在する中で、世代交代が起こってくるということ。私が教えた学生たちも、もうお父さん・お母さんになり、その子どもたちが、現地の言語を学ぶ。ベルリンに住むスリランカの学生のケースでは、娘さんが、中学校と高校でドイツ語を4年間で習得して、それで見事に、中学から高校入試、それから高校から大学の方に入りつつある。移民が国を出ていく中で、世代交代が伴っていると、常日頃コミュニケーションを取りながら感じている。

今日は、オのグループとアのグループに入って、皆さんのグループ討論を聞くことができた。皆さんすごく積極的で、生き生きとして、澆刺として、コミュニケーションがとれていて、素晴らしいなと思った。出身高校が違うのに、まるで、ずっとお友達であったかのように、グループ討論ができるというのは、皆さんの柔軟性、環境適応性が素晴らしいなということを痛感した一日。これも、講師の先生方が、皆さんに大変分かりやすい話をしてくださったことから、うまくいったんだなと思っている。

高校のファシリテーターの先生方、それからフォーラムの関係者は企画の段階から今日のプログラムを作ってくださったので、そうした上で、いい特別講座になったなと思って感謝をしている。皆さん、どうもありがとうございました。

